

第 8 期事業報告書

(2011 年 4 月 1 日から 2012 年 3 月 31 日まで)

はじめに

近年、国際協力の在り方が見直される中で、NGO の役割が益々重要視されてきた。実際、ODA（政府開発援助）の予算は年々減少しつつある一方で、政府は NGO とのパートナーシップで行う予算を増やしている。これは国際開発事業の要求がより多様化し、柔軟に対応できる小規模組織が必要になってきていること、政府の開発援助に関わる資金が欠乏している現状で、資金的にも効率のよい事業が要求されていること、NGO の開発支援能力が高まっていること等が一層 NGO への期待を大きくしていると考えられる。見方を変えれば、開発 NGO の活動は政府系国際協力事業に引けをとらぬ力があることを認められつつあると言えよう。

2003 年より、本会が行ってきたインドでの支援活動は仕事に誇りと自信を持った農村青年、農村女子を育成することに重点をおいてきた。その成果は十分に出てきている。2011 年度後半から、様々な活動が彼ら、彼女たちが中心になって行われている。例えば農村保健ボランティア、SHG（Self-Help Group：小規模自助グループ）、アーシャ学校の合同運動会、特別学校やキャンプ、有機農業組合加工部門の活動等である。これは「持続可能な開発」を大きな柱としている継続教育学部にとって、大きな前進であったといえる。

インドでの活動をより自立・発展させるために、2010 年 10 月に設立支援したインドの NGO 「ASHA SMILE TRUST (AST)」では、7 名の農村出身スタッフが精力的に活動し、また、農村のリーダーとしても重要な役割を果たしている。かつて継続教育学部の高学歴のプロジェクトスタッフが行っていた農村での活動の大部分は彼らによってなされている。アーシャ学校のモニタリング、裁縫クラス運営と監督、稲作・養鶏普及、SHG の組織運営に関するモニタリング、収穫感謝祭の組織運営等である。AST と継続教育学部との関係が新たなアプローチを模索する上で貴重な経験になると思われる。

本会が発足し、早 8 年が経過した。その間、多くの支援者、個人の寄付金、財団助成金、日本政府系受託業務収入（JICA）等によって、今日に至るまで本会の目標に向かって活動することを許された。また現地のインド人スタッフ、本会派遣スタッフ、短期派遣専門家、国内事務局、および本会理事、協力者らの多大な尽力によって実りある活動成果を上げることができている。心より感謝を申し上げる。



2011年度 現地活動スタッフ、派遣専門家

1. 現地活動スタッフ派遣

町上貴也：2011年4月～2012年3月派遣
現地事務局主任兼会計主任
総務事務、本会広報、会計業務担当



川口景子：2011年7月～2012年3月派遣
現地調査、事業形成、プロジェクト補佐

2. 派遣専門家

三浦孝子：
2011年8月21日より45日間
2012年2月2日より2ヶ月間派遣
母子保健事業推進



高丸和彦：2012年2月3日より4週間派遣
養鶏、特に鶏卵孵化技術支援

石原 潔：2012年2月3日より4週間派遣
マーケティング・食肉加工支援



三浦真希：2011年8月21日より45日間派遣
アーシャ・MSCNE 英語版ホームページ作成

2011年度 活動報告

1. 農業指導者研修事業の運営支援事業

「10ヶ月の持続可能な農業研修コース（SCSA）」の支援

期 間	2011年7月16日～2012年4月5日
研修生人数	11名（入学生全員卒業） 東北インド：4名（うち女性3名） ミャンマー：5名、日本人：2名
研修の特徴	農村リーダー、またはNGOワーカーとして即戦力になりうるような人材育成を目指す。研修生は共同生活、実習、講義、見学旅行などを通して持続可能な発展について学び、様々な経験、視点や異文化間の人間関係を養う。
研修内容	技術分野：有機農業、稲作、養魚、キノコ栽培、養鶏、食品加工、農村組織、簿記、パソコン等 その他：開発論、農村管理運営、農村調査、研修旅行、リーダーシップ論等
卒業生進路	女性の卒業生2名はインターンとして2012年6月21日より継続教育学部で研修を継続
アーシャの支援内容	< 講師参加 > 有機農業・稲作・養魚・キノコ栽培・農村組織・食品加工・養鶏等 講師：三浦照男、川口景子、町上貴也、高丸和彦（専門家）、石原潔（専門家） < カリキュラム・コース運営助言 > 三浦照男、川口景子



写真 1：2011年7月 SCSA 入学式にて

今年度、初めて日本人が当研修コースに入学したが、かれらが研修生でいることで、研修に障害はなかったようである。かえって、お互いに刺激し合いながら研修ができたようであった。今後、このコースをより国際的なものとするかどうか、未来のニーズを鑑み、熟慮する必要がある。

2012年度は、日本人研修生1名、ミャンマー2名、インド各地から4名入学が決定。

2. 未就学児のための初等教育施設の設立運営支援

学校数・生徒数	カンジャサ校（196名）、ティルクワール校（196名）、 マイダ校（65名）、ジャリ校（69名）、バルゴナ校（30名）、 バリバジャヤ校（32名）、ハルディ校（35名）、 チャカジャリ校（30名）、ギンジ校（2011年度新設：204名） 合計9校、（ ）内は生徒数（2011年9月現在）
生徒数	5歳から15歳までの児童 約850名
ボランティア 教師数	農村ボランティア教師 約25名
アーシャの 支援内容	アーシャ学校運営、教師の育成、特別クラスの指導・助言、奨学金の支給、学校の建設支援・修繕等

・ギンジ村にアーシャ学校 開校

ギンジ村の長老、校長、学校の先生からの要望により、村の住民有志が主催していた無認可の学校をアーシャ学校として開校することが決定。以前は青空教室を余儀なくされていたが、住民からの学校用地の寄付により、学校校舎を建設。2011年度11月に開校、無認可の時には150名だった児童は200名を超えた。



写真2：ギンジ村 開校式

・アーシャ学校 生徒数の増加

教師の給与に加えて、生徒一人に当たり10ルピー（約17円）の学校運営費を支給することにより、教師が生徒の勧誘に熱心になったため大幅な生徒数の増加となった。

この新しいインセンティブの方法は3つのアーシャ学校で功を奏し、生徒数が格段に増えた。

・アーシャ学校の教師による自主的なプログラム運営の推進

アーシャ学校の教師が環境教育キャンプを企画・運営できるよう、教師6名を選出し、研修会を実施。12月に2回、環境教育キャンプを開催。小学校高学年の児童100名が参加。これまでは継続教育学部職員のサポートにまわりがちだった子供たちへの授業も、意識の改善を徹底し、教師に責任感と自発的な態度の醸成がみられ、教師は予想以上の役割を果たした。

・アーシャ学校合同大運動会のボランティア教師による企画・実施

改善点は多々あるが、持続可能な活動を推進するため、今後も継続予定。



写真3：アーシャ学校合同大運動会の様子

3. 奨学金を支給する事業

(1) 貧困家庭の子供への奨学金

2011年9月より2012年3月まで、述べ5,672名の児童に一人あたり10ルピーの奨学金を支給した。支給総額は56,720ルピー(107,768円)となった。

これは「2. 未就学児のための初等教育施設の設立運営支援」給与手当において計上。



写真4：アーシャ学校 授業風景

(2) ミャンマーの持続可能な農業に関する支援

サムヒッキンボトム農工科学大学 家政科学科2年生のMs. Zawng Nyoï(ミャンマー・カチン州出身、SCSA卒業生)に奨学金を支給。



写真5：Ms. Zawng Nyoï

将来の目標はミャンマーで教員を務めること。

4. 農村の地域開発と農業の改善及び普及を支援する事業

(1) 北インドの小規模農民生活改善のための実用的プロジェクト

アーシャ農村学校の運営支援	バルゴナ校(2008年10月開校) カンジャサ校(2010年1月開校) ハルディ校(2010年1月開校) マエダ校(2010年1月開校)
SHG 会員数	SHG 30ヶ村 61団体、会員数727名
研修会 セミナー開催 イベント等 活動支援 スタッフ研修	農村収入向上技術支援 日本米栽培セミナー、養鶏セミナー、裁縫クラス、有機野菜栽培研修、きのこ栽培研修、女性と農村青年のためのSHG(Self-Help Group:小規模自助グループ)リーダー研修、アラハバード有機農業組合食品加工・マーケティング支援、その他収入向上セミナー NGO アーシャスマイルトラスト(AST)支援 指導スタッフ研修
アーシャの支援内容	アーシャ農村学校運営支援、指導者育成支援、セミナーの運営支援・講師、農村学校の修繕等



研修会、セミナー開催、イベント等 活動支援実績・成果

日本米栽培セミナー

日程	セミナー内容
5/20	日本米収穫「あきたこまち」
7/11,14	籾の選別、前処理、播種、育苗研修
8/2	田植えの実践研修
9/30	4 か村 10 件の農家を訪問、栽培比較調査
10/24	日本米収穫研修
12/14	日本米の播種と育苗研修
1/23	機械用苗の準備、機械植えの方法、スケジュール立案、機械植えの実演
1/27~2/2	11名の農家の田んぼ 計2.8haにおいて機械植え実施
3/1	栽培状況の確認。苗の生育は順調で、今までで最高の収穫量(3トン以上)が見込まれる
研修用設備について	<ul style="list-style-type: none"> ・日本製の精米機を導入：従来の精米機はインド米(長粒米)用のもので、精米時にくず米が多かったが、新しい精米機の導入により、精度のよい精米が可能となった ・4条植え田植え機の導入：現地では田植え機を始めてみる農家がほとんど。苗で植えられるようになったため、米の収量は依然に比べ格段によくなった。

インドでは日本米の価格は高級インド米より4倍近い価格で取引されている。インドに滞在する日本人ビジネスマンが増加する傾向にあり、現在50トン以上の需要があることから、今後日本米の生産を単に農民の収入向上としてとらえるのではなく、組合運営費を賄うための事業としてとらえることが肝要と考える。組合が自立して運営するためにはどのように運営費を賄っていくかが大きなカギとなる。



写真 6：田植え機運転研修

養鶏セミナー

研修内容	9/26~28：養鶏研修(参加者13名)
特記事項	今までの研修生の中で4名が養鶏を開始、うち2名は規模の拡大を図るまでに至る。継続的な資金管理につまづき、養鶏開始まで至らない者が多い。
研修の設備について	孵卵器の制作：養鶏の専門家、高丸氏指導のもと、インド国内で手に入る材料で、低コストの孵卵器を制作。



写真 8：クジ村の研修生とその鶏舎



写真 7：完成した孵卵器

裁縫クラス

開催場所	事業対象地域にある農民学校3校	
研修期間	6か月(週3回)	
研修生の月謝	30ルピー(約50円)	
研修内容	一般	ブラウス、子供服
	中級者	アーシャ学校の制服600着の制作
	上級者	サロワルクルタ(未婚女性の民族服)
特記事項	一般研修生の中から優秀な生徒を選び、これらの研修生はアーシャ学校の制服600着の制作を担当。60セットの制服を仕上げた時点で足踏みミシン一台を供与。その中でさらに優秀な生徒は上級者コース(裁縫教師育成コース)を受講	
研修用設備について	裁縫研修が滞りなくできるよう、練習用ミシンを修理・購入	

過去4年間、当会にて裁縫技術の指導を行い、その中で優秀な農村女性が教師となり、裁縫クラスを実施。農村女性が同じ農村住民に裁縫を指導できるようになったことは大きな進歩であり、今後の事業の方針(農村住民リーダーが隣人に新しい技術・知識を伝えること)に大きな希望を与えた。



写真9：中級者クラスの研修風景



写真10：上級者向けコースを終えた女性によるアーシャ農村学校での裁縫教室

有機野菜栽培研修

日程	セミナー内容
11/3~5	有機農業研修(近代農業の違い、有機農業の必要性、有機農産物の都市の消費者にとっての価値)
12/9	グループ組織と直接販売に関する研修
1月~3月	堆肥・ぼかし・ニームオイル・稲わらマルチを用い、14軒の農家(計0.43ha)が有機野菜を生産・販売。平均収入395ルピー/日
1/20	ミーティング 生産物の運搬ルール制定、問題点の把握と解決策の提案、リーダーの役割確認
特記事項	生産を開始した新しい品種：レタス、パクチョイ、ブロッコリー、白菜、紫キャベツ、レッドラディッシュ



写真11：有機野菜の移動式直売の様子



写真12：きのこ栽培研修の様子

きのこ栽培研修

11/26：マッシュルーム栽培研修

2/20～24：持続可能なきのこ栽培研修

アーシャマイルトラスト(AST)アニメータ2名、

SCSA 卒業生7名参加

きのこの調理法と栄養価、持続可能なきのこ栽培、組織培養、菌糸培養基づくりと殺菌方法、菌糸の植え付け、きのこハウスの管理



写真 13：組織運営に関する研修

女性と農村青年のための SHG (Self-Help Group :

小規模自助グループ) リーダー研修

5/23～6/2：簿記、リーダーシップ論、育苗施設について研修(農民学校4校 参加者100名)

9/19～22：組織運営に関する研修

(農民学校4校 参加者103名)

アラハバード有機農業組合

食品加工・マーケティング支援

アラハバード有機農業組合 食品加工部では、味噌、醤油、酢、スモークチキン、ソーセージ、チキン餃子、レモンジュースなどの製造・販売を行っている。2011年度は乾燥モロヘイヤやテンメンジャンの商品開発が行われた。

9/24：デリー日本人学校夏祭り出店

10/13・14：継続教育学部フードフェア出店

11/13：アラハバード聖書協会主催のフェア出店

12/4：デリー日本人会チャリティー・メーカー出店

2/24：アラハバード有機農業組合主催のフードフェアにてピザ、チキン・パコラ(鶏のから揚げ) 照り焼きチキン、餃子、ソーセージを販売。来場者200名

3/2：フードフェア反省会



写真 14：デリー日本人会夏祭りでの出店



写真 15：フードフェアにて加工食品を販売

現在、食品加工品、日本米栽培、マーケティング

開発等の改善・向上が必要とされているため、日本

より、高丸・石原の両氏を派遣。かれらの専門的技

術指導によりアラハバード産の日本の調味料、特に味噌・醬

油・米酢はインド全国に知れ渡るようになり、売り上げも好調

である。

その他収入向上セミナー

2010/11～2011/5：農村女性のための美容教師研修(3名)

5/23～25：教科書の製本技術セミナー(農村青年15名参加)

アーシャ学校に常備している教科書の修理と製本技術習得



写真 16：製本技術セミナーの様子

NGO アーシャスマイルトラスト (AST) 支援

本会と継続教育学部の協働で設立された AST スタッフ (スーパーバイザー2名、アニメーター5名) の育成を行い、AST スタッフは組織の運営指導ができるまでに成長した。一団体 10~12名の小規模組織で毎月1~2回の会合を持ち、貯蓄、ローンの貸し出し、教育や収入向上のための学びができるように、村の中で監督、モニタリング、セミナー開催等の業務が担当できるように指導・助言活動をした。この事業のコーディネーター、ナミタ・シンの産休(7か月間)中、川口景子が代行をした。ナミタは2012年6月20日に職場復帰予定。

7/25~26: キャパシティ構築研修

12/19~20: 銀行口座開設についての研修

2/2: マイクロクレジット研修

2/18: 収穫感謝祭 (HTC) 企画・運営支援

HTC は継続教育学部が主催していたが、今年度初めて AST が主催。準備は12月から行われ、日本人スタッフの助言を受けながら、企画・計画・役割分担・会場デザイン・準備・リハーサルを含め、2か月間のイベント・マネジメントの研修となった。

今回は特に継続教育学部、AST、SHG、アーシャ学校、アラハバード有機農業組合、裁縫クラス、母子保健活動の活動を村人に紹介することに力をいれた。

収穫祭では子供たち、SCSA 学生、農村保健ボランティア等の歌踊り等の催しものがあり、500名以上の近隣住民が祭りに参加した。SHG 手作りの昼食販売、環境保全、母子保健や教育の重要性を訴えるための寸劇、継続学部の活動紹介、子どもや青年等による歌・踊り等様々な催しが披露され、よい交流の場となった。同時に、

村の住民に広く、上記の活動を知ってもらう良い機会となった。収穫祭当日は、本会の牧野理事長、飯沼副理事長も来賓され、共に事業の収穫の喜びを分かち合った。



写真 17: 収穫感謝祭の様子



写真 18: 収穫感謝祭主催メンバー

指導スタッフ研修

11/24~12/1: タイ国チェンマイ、チェンライを中心にタイ有機農産物直接販売の実情、日本米栽培、キノコ栽培に関する研修

(三浦、川口、継続教育学部の有機農業組合担当スタッフが参加)

4/3~6/22: 日本での有機農業研修 (サントシュクマール: 継続教育学部農場管理責任者) 愛農学園農業高校 (三重県: 奥田校長・山本事務局長) 高丸農場 (熊本県: 高丸) ゴーバル工房 (岐阜県: 石原) 霜里農場 (埼玉県: 角田) 名古屋 (町上) 山さと農場 (福島県: 佐藤) 那須塩原 (三浦、牧野) にて研修

(2)北インドの農村栄養と母子保健改善プロジェクト

	2010年12月末	2012年3月
農村ヘルス ボランティア育成	VHV リーダー6名 VHV 5名 VHV アシスタント 18名	VHV リーダー 6名 VHV リーダー候補者 2名 VHV (リーダーなしで活動できる) 3名 VHV 候補者 1名 VHA と VHA 候補者 12名
Health Gathering / 政府の農村保健員 (BHW)による セミナー	<p>5月定例 Health Gathering 「発育モニタリングの必要性と緑黄色野菜の健康への役割」</p> <p>6月定例 Health Gathering 「母乳育児の母子への効果」 5・6月 合計 46回 1,033名参加</p> <p>7月定例 Health Gathering 20カ村 38会場 775名参加 「母乳の栄養、動物のミルクとの比較」</p> <p>8月定例 Health Gathering 17会場 317名参加 「世界母乳育児週間：世界中で母乳育児が推進されている訳」</p> <p>9月定例 Health Gathering 20会場 446名参加 「緑黄色野菜、特に緑葉野菜の栄養と、母子の健康」</p> <p>10月定例 Health Gathering 20カ村 30会場 821名参加 思春期女性の健康と月経 妊娠中の栄養と健康 母乳の量を増やし、トラブルを減らすための適切な赤ちゃんの抱き方と含ませ方</p> <p>11月定例 Health Gathering 54会場、1034名参加 家庭菜園の目的とやり方 授乳中の母親と妊娠中の女性にとっての緑黄色野菜の効用 補完食への緑黄色野菜のとり入れ方 BHWを招聘してのセミナー 15カ村 352名参加 女性の妊娠出産産後を健康に過ごすために 乳幼児の健康、特に予防接種の必要性 家族計画・・・より健康な家庭生活のために</p> <p>12月定例 Health Gathering 27会場 762名 妊娠中から母乳育児のスタートへ...注意すべきことから</p> <p>1月定例 Health Gathering 27カ村 61会場 886名参加 母乳育児中のよくある間違い 緑葉野菜を補完食に使おう</p> <p>2月定例 Health Gathering 27カ村 60会場 868名 母乳育児の始め方、 母乳の飲ませ方、抱っこの仕方</p>	
体重測定プログラム	<p>対象：3歳未満児</p> <p>10月 20会場 測定人数 405名 11月 20会場 測定人数 492名 12月 20会場 測定人数 629名 1月 22会場 測定人数 645名 2月 22会場 測定人数 716名</p> <p>AWCを会場にして Anganwadi Worker(AWW), BHW(Basic Health Worker), ASHA と協力して実施。</p>	
家庭訪問	<p>リーダー、VHV、VHAによる家庭訪問を実施。</p> <p>7月 初回訪問 80件 継続訪問 120件 8月 初回訪問 81件 継続訪問 117件 9月 初回訪問 34件 継続訪問 134件 10月 初回訪問 139件 継続訪問 134件 11月 初回訪問 41件 継続訪問 237件 12月 初回訪問 89件 継続訪問 198件 1月 初回訪問 42件 継続訪問 284件 2月 初回訪問 53件 継続訪問 260件</p>	

家庭菜園の普及	<p>9/13,15 23 26 の4日間、1日4ヵ村に分かれ、合計16ヵ村にてHealthy Cookingを開催。合計1019名の参加。 (参加者内訳：女性・未婚女性十代後半女性含む545名、 子ども440名、男性34名 メニュー：モロヘイヤ炒めダル豆入り 空芯菜炒め入りダルスープ 7月～8月初旬：モロヘイヤ・空芯菜の苗、夏野菜の種を20ヵ村213名の女性に配布 9月：冬野菜(大根、からし菜、コリアンダー、ハウレンソウ、ビーツ、フェヌグリーク)の種を配布(3日間で20ヵ村、504名の女性に配布) 2/18 収穫感謝祭にて、モロヘイヤのポスターセッションを実施。モロヘイヤ栽培に興味を持ってくれた村人、各地から集まったSHGのメンバー、VHVにモロヘイヤの種を総計900袋以上配布。</p>
VHV, VHA 研修	<p>5/26・27：VHV12名、VHA9名参加 「栄養と栄養不足により引き起こされる病気について」「発達曲線の作成と重要性について」 8/29・30、9/5：VHV11名、VHA11名参加 村での活動の振り返り、問題改善の対処法、栄養の基礎知識の講義・試験、母乳育児カウンセリングについて講義と実習、モロヘイヤと空芯菜を使ったメニューの調理実習 11/16,18 VHA18名参加 「母乳育児の重要性」、「動物の乳と母乳の違い」、「母乳育児のやり方」</p>
VHV ミーティング	<p>定例リーダーミーティング(毎月) 反省会・翌月計画のための全員ミーティング(毎月)</p>
特記事項	<p>2011年度は、Jasra郡の5地区27ヵ村(ハムレット)を中心とした活動を実施。リーダーを中心に、VHV、VHAと協力しあい、政府雇用のASHAとAWWとも連携・協働。 母乳育児を開始前後に母乳育児以外のものを与えなかった母親が、2010年に比較して73.9%から89.6%に上昇。</p>

この事業の推進のため、専門家・三浦孝子(母子保健・母乳育児専門)を派遣。彼女は継続教育学部の担当スタッフ3名と共に、農村保健ボランティア(VHV)の育成とVHVのアシスタント(VHA)の育成を手掛けた。彼女たちがチームを作り、自発的且つ自立的活動ができるように指導、助言を行った。

現在VHV、VHAがジャスラ郡とカウンディアラ郡の農村に20ヵ村において、自発的な母子保健活動(農村保健活動、完全母乳育児、健康栄養、補完食、乳幼児の体重測定等)を行っている。また、郡レベルの政府保健機関はVHV・VHAの活動を認め、郡の保健センター職員と協働で母子保健活動がなされるようになってきた。これらは継続教育学部と農村住民の協働で行われてきたことで、大きな成果であった。

この母子保健事業はJICAの経済緊急包括型事業の支援で行われ、2012年3月で終了したが、JICA草の根技術協力でこれまでの活動を発展させた「インド・政府保健機関スタッフと農村保健ボランティアの共同による統合的母子保健事業」が採択されたので、他の地域(シャンカルガル郡)を含め、来年度も継続して活動を実施する。



写真 19：VHV、VHA 研修の様子



写真 20：初訪問の村での Health Gathering イントロダクション



写真 21：体重測定の様子



写真 22：調理実習風景



写真 23：片道 12 キロの道を自転車で担当地区へ向かう VHV



写真 24：種蒔き指導を受けた農民



写真 25：Healthy Cooking の様子



写真 26：家庭菜園プログラム参加女性への調査のためにインタビューの仕方を練習



写真 27：1 年間で大きな成長を遂げた VHV、VHA たち

5. 事業を推進するための調査研究及び、啓発・広報活動

国内での学生・市民のためのセミナーおよび講演の企画、主催、及び参加

- ・2011/6/18 本会総会の後、現地活動報告会を実施。

報告者：三浦照男、町上、三浦孝子、川口、
サントシュクマール

- ・2011/6 プロジェクト支援者に対し、
現地活動報告を実施（北海道、山形、東京）。

報告者：三浦照男



写真 28：6月18日 報告会の様子

会報の発行

アーシャの活動、そのカウンターパートである継続教育学部のプロジェクトをより広く理解していただくために、年4回の会報を発行した。これらの編集、印刷、送付は全てインドにて行った。

ホームページ

・本会のホームページ更新作業

本会理事である佐藤耕士により更新作業実施。

更新作業内容は、写真の更新、最新の事業報告書掲載、職員に川口景子を追加、アーシャ紹介ビデオ掲載など。

・本会・継続教育学部のホームページ（英語版）を作成

本会・継続教育学部の活動を海外の方々にも知っていただくために作成を決定、三浦真希が作業にあたった。



写真 29：本会 英語版ホームページ

～ の広報活動が功を奏し、有機農産物に関する問い合わせ、また、現地スタッフ、ボランティア、インターン、スタディーツアーに関する問い合わせが増えてきた。実際、2012年度に応募のあった日本人学生、インターン（オーストラリア）、職員候補者は全て本会のホームページを閲覧して、応募してきたとのことであった。

加えて、支援をしてくださっている JICA や財団への本会の活動紹介とアピールをするためにも、今後もホームページを充実させることは重要である。

ワークキャンプ、研修ツアーの開催

2011/11：「インド スタディーツアー」を企画、会員に通知したが、希望者が定数に届かなかったため、中止となった。

2012/2：牧野理事長、飯沼副理事長アラハバード現地視察のため訪問。

次期事業形成調査

2011年度に計画されていた次期事業形成調査は、2012年に実施予定。

6. 事業の実施に関する事項

(1) 特定非営利活動に係る事業

	事業内容	実施日時	実施場所	従事者の人数	受益対象者の範囲及び人数	支出額(千円)
農村指導者研修所の運営支援事業	研修所職員の質の向上を図る事業 農村指導者研修(SCSA)研修費	随時	随所	3名	研修所の研修生約50名	300
未就学児のための初等教育施設の運営を支援する事業	アラハバート県の僻地にあるアーシャ学校の低学年児童を対象にした環境教育を行う	随時	インド・ウハート地区	5名	児童700人	0
	北インドにおける貧困児童のためのへき地教育支援 同アーシャ学校校舎の基盤整備と教師の研修支援、制服作成(ひろしま・祈りの石国際教育交流財団)	随時	インド・ウハート地区	5名	児童700人 教員25名	2,772
奨学金を支給する事業	アラハバート県の貧困家庭に対する奨学金	随時	インド・ウハート地区	3名	20名	0
	ミャンマーの持続可能な農業に関する支援	随時	ミャンマー・カチン州インド・ウハート地区	2名	ミャンマーの開発NGO200人 青年・女性100人	111
農村の地域開発と農業の改善及び普及を支援する事業	北インドの小規模農村生活改善のための実用的農民教育支援(JICA)	2011年4月～2012年3月	インド・ウハート地区	3名	インド・UP州ウハート地区3万人の農村住民	10,290
	インドの農村栄養と母子保健改善支援(JICA)	2011年4月～2012年3月	インド・ウハート地区	4名	インド・UP州ウハート地区30万人の農村住民	16,380
事業を推進するための調査研究及び、啓発広報活動	日本国内における学生及び市民のためのセミナー及び講演の企画、主催、及び参加	随時	日本各地	3名	500名	0
	会報の発行	年4回	日本、インド、米国	1名	日本国内、インド、米国200人	156
	ホームページ維持費(更新費・人件費含む)	随時	随所	2名	日本語・英語が読める不特定多数	135
	ワークキャンプの開催・研修ツアー・訪問者受入	随時	インド・ウハート地区	4名	日本国内、インド、米国100人	91
	次期事業形成諸経費	2011年4月～2012年3月	インド・ウハート地区	2名		0

	事業内容	実施日時	実施場所	従事者の人数	受益対象者の範囲及び人数	支出額(千円)
災害や紛争などによる被災住民への緊急支援活動	災害や紛争などによる被災住民への緊急支援	2011年6月	日本国内	1名	日本国内50人	30
管理費	管理費(インド)	随時	インド、ネパール、ハード地区、日本国内	2名		1,478
	管理費(国内)	随時	日本国内	3名		237
						31,980

(2) その他の事業

事業名	事業内容	実施日時	実施場所	従事者の人数	支出額(千円)
実施無し					